

BPT026-05

会場:201B

時間:5月24日 15:15-15:30

単一の化石産地に同位置性に分布するヒッパリオンの生態学的な相異点—その形態的特性の相違パターン

Ecological distinction of hipparionine taxa distributed sympatric in single locality - detected differential patterns of

渡部 真人^{1*}, 仲谷 英夫²

Mahito Watabe^{1*}, Hideo Nakaya²

¹ 林原古生物学研究センター, ² 鹿児島大学理学部地球環境科学科

¹Center of Paleobiological Research, ²Kagoshima University

中新世後期の哺乳類動物化石産地からは、形態的に区別される2種類以上のヒッパリオン類(ウマ科、奇蹄類)が産出することが知られている。それらの違いは、身体のサイズ、四肢骨のプロポーション、顔面部形態、吻部形態によって認識される。従来、その類歯の咬合面における形態においても区別され、その形質の相異点は重要であると考えられていたが、演者らの研究ではその系統学的価値は低いと判断される。類歯が形成するデンタル・バッテリーにおいては、そのメゾウェアパターンの変異がその食性・生態(環境)の相違を示すことが明らかになった。

2種類以上のヒッパリオン類の頭骨および四肢骨が混在して地層から産出する場合は、頭骨、歯、四肢骨それぞれにおいて別個に認識された異なる形態グループ間の対応関係を明らかにする必要がある。これは、体躯のサイズにおよび対応づけられることが研究によって明らかになった。また、2つ以上のタクサが存在する産地においては、その形態の変異パターンが限定されることが判明した。サイズは類似するが頭骨の形態および四肢骨のプロポーションが異なる場合; サイズがことなるが、そのプロポーションは類似する場合とがある。1つの産地(年代的にほぼ同一として対比される)から3種類~5種類のヒッパリオン類が産出し、それらが頭骨の形態とサイズ、四肢骨のプロポーションによって区別される例もある。このような単一産地における形態の多様性は、その生息環境の多様性を反映していると考えられる。その多様性の有効利用手段が、各形態グループによって異なっていたと考えられる。中央アジアにおけるヒッパリオン化石産地においては、より派生的な鮮新世型のヒッパリオンが中新世型のものと共存する現象も認められる。これは、産地の年代対比とより派生的な鮮新世型哺乳類動物群の起源についての新しいデータを提供する。

キーワード: 中新世, 古生態, ヒッパリオン, 形態, 古環境

Keywords: Miocene, Paleocology, Hipparion, Morphology, Paleoenvironment